

# がん

## Dさん（80代男性・妻と二人暮らし）

大学病院に入院し、がんの治療を受けていましたが、治るための治療がないことがわかりました。苦痛を緩和してもらいながら、自宅で最期まで自分らしい生活をしようと決めました。

### 1 退院

病院での治療後、退院が決定したら在宅療養の準備をします。特別な医療（点滴や胃ろうなど）が必要な場合は、かかりつけ医や訪問看護師の調整・生活環境の整備をします。

### 2 終末期（6～3か月前）

徐々に体が弱まり、仕事や家事などができなくなることが増えてきます。しかし、痛みの緩和によって、自分らしい生活を送ることができます。

### 3 終末期（3～1か月前）

別れの兆候として、人との関わりが面倒になり、社会から身を引くようになります。食欲が低下し、1日中ウトウトと眠っている時間が長くなります。

### 4 終末期（2週間前～1週間前）

多くを眠って過ごし、刺激で目覚めることも難しくなります。しばしば混乱がみられ、現実と夢が錯綜することがあります。

身体的には、血圧の低下、心拍数の増加、体温や呼吸の変化がみられ、手足が冷たくなったり、尿量が減ったり、たんが増えたりします。

### 5 終末期（数日～数時間前）

さらに血圧の低下、心拍数の増加、呼吸のリズムが不規則になったりします。次の呼吸が始まるまでに10秒から30秒かかることもあります。たんがさらに増えることで、のど元でゴロゴロと大きな音がすることがあります。手足が紫色になり、ひざや足首に斑点が現れ、間隔の長い呼吸になると「旅立ちのとき」が近づいています。



## 在宅療養

医師、看護師、ケアマネジャーなどがチームとなって、Dさんと家族を支援します。福祉用具の購入・レンタル、訪問介護や訪問入浴のサービスを受けることもできます。

訪問診療	訪問看護師	訪問薬剤師
定期的に医師が訪問して、症状に応じた緩和ケアを行います。	状態により訪問回数を調整しながら、全身状態の観察・ケアを行います。 24時間体制で対応します。	医師の処方せんに従い、薬を自宅まで届けます。
必要に応じて、医療用の麻薬などを使いながら、苦痛を緩和します。		

### 在宅（自宅）での緩和ケア



住み慣れたわが家で、自分らしく生きることを支えるのが、在宅（自宅）における緩和ケアです。

自宅へ医師、訪問看護師、薬剤師が来てくれて、徐々に強くなってきた痛みや息苦しさに対して薬の調整を行い、苦痛を和らげたり、楽な姿勢、薬の副作用を減らすための工夫を教えてください。

## 在宅医療に関わる専門職のチームが、家族の理解のもと、あなたの意思を尊重し、支えます。

### ～住み慣れた自宅で、最期のときを迎えるために～

住み慣れた自宅で最期まで過ごしたいという思いから、自宅での看取りを前提に在宅医療を選択する方が増えています。がんなどによる痛みや精神的なつらさを医療によってやわらげながら、自宅で大切な人とともに、その人らしい時間を過ごしたいという意思を尊重する医療や看護は「エンドオブライフケア」と呼ばれています。こうした支援体制の整備により、自宅での看取りが可能になっています。

### エンドオブライフケア（人生の最期を支える医療）とは？

入院治療を行っても完治が見込めない終末期のがん、筋萎縮性側索硬化症（ALS）などの病気において、本人と家族の生活の質（QOL＝クオリティ・オブ・ライフ）を大切にしながら、希望に応じて自宅でのケアを中心に行う医療です。

積極的な延命を目的とする治療よりも、痛みや苦痛の緩和、精神的な支えを重視した総合的なケアが中心となります。これらは、「終末期医療」や「緩和治療」とも呼ばれています。

